

明治四十年四月一日創刊 令和六年五月一日 通巻第一、四〇七号 (毎月一回発行)

和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会
会長 間島誉史秀

北海道神宮献詠 五月兼題 「下る(下がる)」

雪を蹴り山頂より一氣に下りしよその手稲山を遙かに見るのみ

飛び来たりて網戸に足掛けぶら下がるこじふから五十雀のさまおもしろきかな

退職の父の写真が送られ来四十一年へ頭が下がる

朝な朝な高血圧のくすり呑む血圧下がり今日の始まる

日日忙しき上がり下がり何とする気温の顔色窺ふ春よ

つつつと木肌下りくるこじふから五十雀一瞬ねずみかとあとずさりたり

今日勝てり今日負けたりの帰る人の歩みが速報ぞエスコンの下り道

ヤニ下がる顔は見せじとチョコク置く本時とつておきの下げも決まれば

除雪あと吾子らはそりで雪山を一氣に下るはしやく声高し

通勤の人波はづれ下りホームで味はふ小さなレジスタンス気分

エレベーター下りれば見舞ふ吾子の居り帰るまで手をにぎりくるるよ

村田俊秋先生選

選者 村田俊秋

会長 間島誉史秀

天位 岩間 亜有加

地位 室岡 和子

人位 南 貴子

秀逸 櫻谷 るみ

秀逸 楽間 直之

秀逸 信田 日裕

佳調 八尾師 絹子

佳調 小野 勇人

佳調 遠田 信之

下る雪が宮司の衣装と色重なり締まる空氣に心の静まる

日本の政治の価値の下がる今次世代つなぐ意識改革

旅立たむ友と語りある部屋の外に雀来たりて軒に上がり下がる

里帰り竿に下げらるるベビー服が居間を占領春日を浴びて

ステップで駅の階段駆け下りる若人の姿見るも楽しき

雲下がり雨降り止まぬ春の日は気も下に向き明日も見難く

病室に下がる折鶴眺めつつ退院待つとふ友の写メール

山肌の残雪溶けて下り来る冷たき春風に旗もよるこぶ

雪解けの水と一緒に下る石はじめましてとぶつかりながら

お供へのピワのお下がり頂くは甘くてやさしい父母の味

長瀬ながとろを竿一本で下りゆく急流操り息をのむ凄さ

参道の満ちて下がる桜花「天国みたい」と孫は言ふなり

縁結びの出雲大社の神神に下り参道も手を合はせつつ

小川 紫織

大瀧 廣子

石川 弘子

門前 和幸

窪田 明美

宮城 涼

梶谷 久寿美

鎌田 憲子

後藤 優美子

重川 啓子

中島 正倫

大桃 小やゑ

加藤 紀恵子

総評

天位 (岩間亜有加)

父の写真が送られてきたのだ。退職記念のもの。四十一年間勤務しての退職。「頭が下がる」の一言に、ご苦労さんの心と感謝の念。そして、少し休みなさいね、との慰労の気持ちが進められている。

地位 (室岡 和子)

病の癒えて元気になった作者。大事をとって血圧を下げる薬を飲んでいるのだ。今朝は血圧も下がって体調がいい。さあ、今日もわたしの一日が始まると、自分に言い聞かせる。心の伝わってくる作。

人位 (南 貴子)

農業に従事する作者。毎日毎日忙しい。気になるのは気温。農作物に好適の気温ばかりではない。寒暖が入り混じってくる。上がり下がりがある度に「気温の顔色窺ふ」作者。農業従事者の苦労から生まれた、ユーモアのある表現。生活全部を示してもいよう。

秀逸 (櫻谷 るみ)

木肌を「つつつつ」と下りてくる五十雀。一瞬、ねずみかと思つて後退りしたのだ。直ぐに五十雀と分かり、見つめる。そのとき「つつつつ」の擬態語が生まれたのだ。「つつ、つつ」ではない。「つつつつ」である。連続性の違いに気付かされる。

秀逸 (楽間 直之)

うまい。エスコンとあるから北海道日本ハムの試合の帰りの様子を歌っていることが分かる。日ハムの勝った、負けたは、日ハムファンの「歩み」で分かるというのだ。新聞、テレビの報道よりも早いのだ。「歩み」の主は、作者自身でもあろう。

秀逸 (信田 日裕)

中学教師の作者。宮沢賢治に詳しい作者なのでその授業か。深知識に支えられてのものだが、「ヤニ下がる顔は見せじとチョークを置く」のだが、ちゃんと「下げ(落ち。結び)」を決めているのだ。ベテラン教師の一首。

佳調 (八尾師絹子)

除雪後の雪山。そこは、たちまち子供たちの遊び場となる。そりを持ち出しての遊び。これは今日の状況では考えられない。作者の若かった頃の「吾子」の冬のそり遊びを思い出しての作であろう。子供も大人も、心の豊かな時代があつたのだ。

佳調 (小野 勇人)

俺は「お上りさんではないぞ」と、下りホームで、向こう側のホームの輩を見ているのだ。「小さなレジスタンス気分」を味わいながら。「人波はづれ」は「人並外れ」を掛けているのだ。「お上りさん」の群れを、下りホームで、ちよつぱりアイロニーを含んだ目で見ているのだ。思いが出ている。

佳調 (遠田 信之)

見舞に来てくれた吾子。連絡があつて、エレベーターで階下まで下りたのだ。直ぐに握手。病室で、そして帰る時まで握手をしていたのだ。「握手」ではなく「にぎりくるるよ」なのである。心の伝わり具合、こもっている暖かさの違いがある。

札幌興風会 五月兼題(一) 「牛」

村田俊秋先生選

久々に牛乳ビンで飲む時は腰に手を当てグイといきたい

天位 窪田明美

評 よくぞ歌ったたり、と言いたくなる作品。コップに注ぎ、静かに飲んだのではない。牛乳ビンに口をあて、腰に手を当て、グイといきたいとあるが、グイと飲んだに違いない。冒頭に、「久々に」とあるから。コップでよし、牛乳ビンで飲むのは更によし、との主張。

牛肉を食することに心よぎる生きものの命と人間の我

地位 室岡和子

評 牛肉を食べるのは普通のこと。作者ももちろん食べているのだが、食へることに心よぎるものがあるのだ。「生きものの命と人間の我」ということ。人間に食べられるために処理されていく牛などの命。そしてそれを食べている私という命。大きなことを考えながら、感謝していただいている作者なのだ。

記憶から思ひ出取り出し笑み零る反芻をする牛のごとくに

人位 南貴子

評 多くの記憶。その中から時には思い出してみる事柄。そして笑いのこぼれるものもある。その思い出を二度三度と描きながら、その都度笑ってしまうのだ。まるで牛の反芻のように。記憶とは消え去るものではなく、甦りきて、今の己を支えるものという指摘の作。

背に乗せたねずみに先を越されても二番の牛のやうに生きたし

秀逸 小野勇人

羊かとよくよく見ればゆつたりと草食む牛達羊ヶ丘よ

秀逸 梶谷久寿美

踏み台なる牛のぬいぐるみに器用にも立ちて神棚おろがむ四歳は

秀逸 遠田信之

思春期に岩手の山奥葛巻町放牧牛ののどかなりしよ

佳調 大湯廣子

次次とオソ18が牛襲ひ被害総額二千万超

佳調 後藤優美子

天満宮「一願成就」の撫牛なでうしに我は祈りぬ家族の平和(北野天満宮・京都)

佳調 信田日裕

北海道の牛放し飼ひ高原の自然の乳はクリーム旨し

悲喜こもごも乗せて走りゆく特急を横目に草食む牛のゐる夏（帰省）

大阪の天満のけいだいの牛の像に友と御利益願ひナゼナゼ

石狩の笑^{ぐみ}莢の浜みち歩むとき千櫛の牛の歌よみがへる

薄暗い畜舎に群れる雄牛たち怯えた目つきは行く末知つてか（米国のとある肉牛農場で）

検査日のコレステロール対策に七日前から無脂肪牛乳

八尾師 絹子

岩間 亜有加

加藤 紀恵子

大桃 小やゑ

宮城 涼

櫻谷 るみ

札幌興風会 五月兼題(二) 「トラック」

村田俊秋先生選

これほどに日日のお世話になりながら「トラック」を詠めず恩知らずと知る

天位 小野 勇人

評 どれほどトラックを使ってきたらうか。「お世話になりながら」トラックに、その運転手さんに、深く思いを馳せていたことはなかったとの「詫び」。「恩知らず」と己を責める。二十四年問題として、運送業界のことが報じられている。そうしたことも一首の背景にあらう。

引越しのトラック停まりつぎつぎと降ろさるるなかに補助つき自転車

地位 櫻谷 るみ

評 よくぞ、そこに目がいききましたね、と言いたくなる作品。近所に引越しのトラックが停まって、荷を下ろしている。その中に補助輪付きの自転車がある。「補助つき自転車」と名詞で終わっているが、そのあとに、この自転車に乗る幼い子を思い描いているのである。

さくら花満つる参道に被ひ待つトラック二台かしこみてをり

人位 大桃 小やゑ

評 神宮の参道にトラック二台。安全を願って、お祓いに来ているのだ。その停まっている様子を「かしこみてをり」と厳かに詠んでいる。作者も読者も、このように感じてしまうトラックの静かに停まっている様子なのである。道路を走るあのトラックとは違う佇いを見たのである。

トラックは力もちにて偉大なり家具に歯ブラシ夢まで載せて

秀逸 窪田 明美

軽トラの荷台に乗りての援農を生徒は何よりも熱く語りぬ（宿泊学習の農業体験・富良野）

秀逸 信田 日裕

年度末小型トラック走り去る隣家の学生はや社会人

秀逸 梶谷 久寿美

軽トラが任務背負つて道走る質実の価値誇らしく見せ（米国自家用大型トラックは見栄）

佳調 宮城 涼

朝の吾子ゴミ収集車になりきりて葉の殻を回収しくるる

佳調 遠田 信之

雪多く厨の窓まどふさがりぬ除雪をたのむにトラック一台

佳調 室岡 和子

トラックの荷台上にサラブレッドは不安な様子そのつぶらな目に

八尾師 絹子

誤出荷の謎解きをしたるドライバー曇り顔にて荷札を捲る

南 貴子

現代になくはならぬトラックは全国くまなく世のため走る

大 湯 廣子

落下雪でトラックの窓の割れたるを職人わざよ手早く直しぬ

加藤 紀恵子

大型のトラック四台並びぬるマンションの前忙しい時期なる

岩 間 亜有加

乗用車を載せて走るトラックをハラハラ見送るゆらゆら動くに

鎌 田 憲子

トラックのドライバーらのマドンナよ心に流るる桜花舞ふ街（歌手 八代さん）

石川 弘子

トラックが新生活をのせてゆく新しい町新しい道

後藤 優美子

札幌興風会 五月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

嘉納治五郎織見高邁剛毅にして世界文化の親善はかる

天位 八尾師 絹子

テーブルを飾る折紙がたのしみと幸せ貫ふボランティアの一日(ボランティアのランチサロン)

地位 重川 啓子

年齢を重ね来るほど人生から「初めて」がとぼし傘寿迎ふる

人位 石川 弘子

妹が好みて入りたる野天風呂遺影と訪ぬる鹿教湯かけゆの里に

秀逸 梶谷 久寿美

春風を吸へばプチプチ増殖す私のなかのミトコンドリア

秀逸 大桃 小やゑ

欲しい物は自分で求むる父のためせめてもと思ひ刺繍する我(父の退職祝いに)

秀逸 岩間 亜有加

眼帯にマスク姿の我を見て子は幾度も「目がとれたの」と問ふ

佳調 遠田 信之

転居して住まひを定め日が経ちぬ思ひを探れば旅人が居て

佳調 宮城 涼

四月なかば庭の黄水仙あざやかに憂き事しばし風にゆだねて

佳調 加藤 紀恵子

インターホン新しくなりて取り扱ひ説明書読むも取り扱へず

櫻谷 るみ

十六の吾子の宵つぱり朝寝坊我も通りし道と思へど

南 貴子

育てし子の確かな目と舌を喜びて門出を祝ふ銀座の老舗

小野 勇人

春の陽に木に芽吹く日も七十代は「変はらないね」が挨拶ことば

窪田 明美

血液の検査結果は年なりと医師に言はれる特定健診

室岡 和子

公園の小さな川の勢ひの雪どけ水に春の声きく

大湯 廣子

会のたより

●四月二十日(土)十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなるの間に十一時から歌会を行いました。

【出席者】村田先生、石川、大潟、大桃、小川、重川、鎌田、窪田、櫻谷、八尾師、室岡各会員、事務局の中島、片石各権禰宜、岩間事務局の以上十四名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

四月誕生者の原里子様には御誕生祝の短冊を郵送致しました。宮城涼様には後日お渡しさせて頂きます。茲にお祝い申し上げ、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●「明治天皇御増祀六十年によせて」ご出詠のお願い

本年は明治天皇御増祀六十年の佳節にあたります。これを記念致しまして、「明治天皇御増祀六十年によせて」の兼題で皆様の和歌をお寄せ下さい。七月二十五日(木)締切です。お寄せいただきました歌は、十月発行予定の歌集『興風』十一巻に掲載致しますので是非ご出詠下さい。

(事務局・遠田)

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年(一九〇七)四月、当時の札幌神社(現北海道神宮)宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていますが、昭和五十年(一九七五)一月

から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者(ご指導頂いている先生)は、宮中御歌所参候、小杉榎郎を初代として、御歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいよう作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができて見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

- 一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四 北海道神宮社務所
- 一、開催 毎月二十日

午前十時より旬祭並献詠祭(本殿) 午前十一時より歌会 (慶陽館・あすなるの間)

正午より短歌勉強会 (慶陽館・あすなるの間)

- 一、月会費 三千元(うち玉串料千円)
- ※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。
- 一、その他

①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠

祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。

②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集『興風』を発刊致します。

③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。

④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL011-621-0261 担当 北海道神宮教化部 遠田(とくだ)

令和六年六月兼題

- 一、北海道神宮献詠 「突く」
- 二、札幌興風会兼題 (一)「雷鳴」 (二)「玄関」 (三)「雑詠」
- ※締切り 五月二十五日(土) 必着
- 三、明治神宮献詠 「蛙」
- ※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意ください。
- 所定の様式にて各自の発送となります。

〒064-8505 札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内 札幌興風会事務局

電話 011-621-0261 発行人 間島 誉史秀 編集人 遠田 信之 印刷人 白馬堂印刷(株)